

堀内家長生庵茶室における動線経路樹を用いた空間分析

八代研究室

00212134 橋本 高志

茶室 露地空間 動線経路樹

1. はじめに

本稿は京都市中京区大黒町にある堀内家長生庵茶室の室内外の空間(写真1)について、限られた空間の中で室と室・庭と室がどのような距離感を保っているのか、また実際に歩く動線はどのようなになっているのかについて考察した。

2. 研究対象

堀内家長生庵庭園は表千家を支える家で、宝永年間より京に住む。蛤御門の変(1864)の大火後、明治2年の再建。長生庵は、図1、図2(敷地面積288.75㎡)のように半桂・長生庵・無着軒の三つの茶室と、外・内露地からなる。

3. 動線経路樹の作成方法

図2のように関係者へのヒアリングをもとに動線を制作した。平面図に動線を描く。亭主は△の仏間、客人は▲の表門が入口となる。実際の動線は自由曲線となるが、ここでは簡略化のため直線上を進み直角または0度~90度で曲がることにし、その線上に各室の位置をプロットする。またプロット的位置は人間が実際に作業を行う位置とする。次に図3のように平面図から動線を取り出し、それぞれの直線部分にナンバリングをする。これをもとに、図4の動線経路樹を作成する。よって各室までの経路が移動距離、曲折(方向・角度・数)、によって明示される。例えば袴着であれば、1, 1-2, 2, 8, 9, 10, 10-1, 11, 12の順の経路で進み6回の右折と、2回の左折、合計8回の曲折があり移動距離は10.3mの位置にあることが分かる。

亭主の長生庵Ⅱを見るとサーキュレーションがある。無着軒から長生庵に向かう経路、D, E, H, I, J, K

と長生庵を通り半桂に入る経路、D, FのKとFが会う地点である。これについて動線経路樹では経路が会う線Kと線Fを点線で結んだ。



写真1 堀内家
(無着軒から内露地を見る)

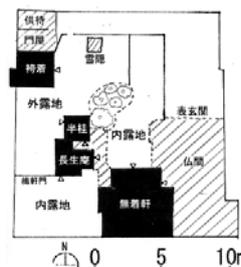


図1 平面構成図

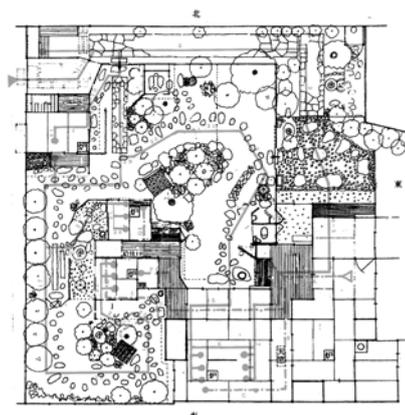


図2 長生庵平面図および動線

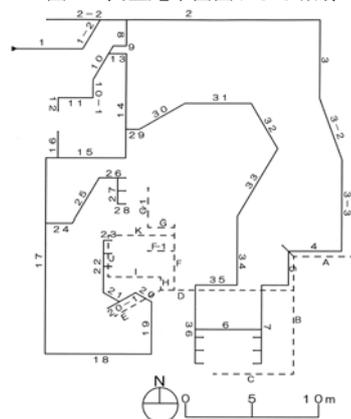


図3 長生庵動線図(図2と同一縮尺)

4. 動線経路樹の分析

図4で客人の移動距離の最長は長生庵③の32.4mで、最短は袴着①の10.3mである。また敷地の大小と移動距離とのおよその関係を把握するために√敷地面積すなわち、図2の敷地と同面積の正方形に置換した場合の一辺の長さを基準線として、図4の中に示した。

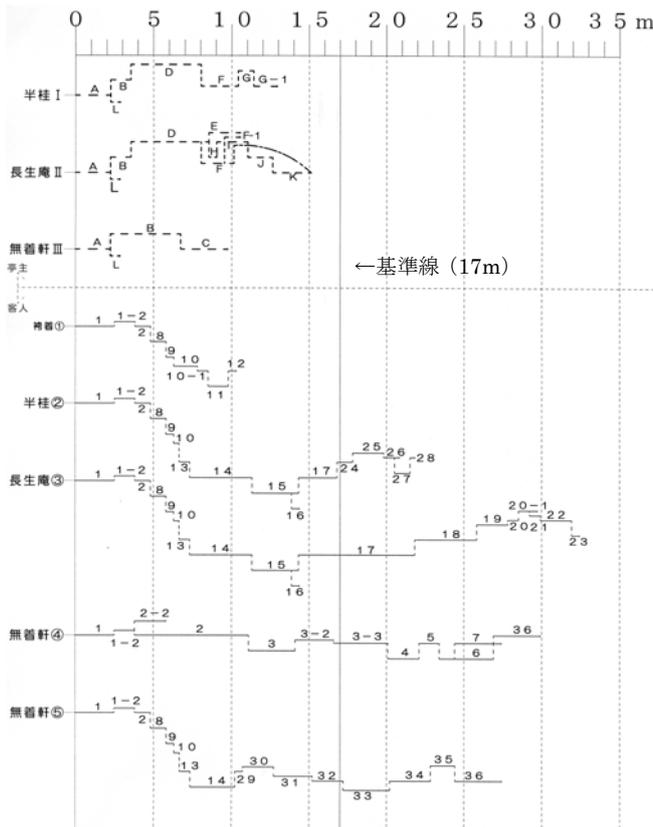


図4 動線経路樹

図5に左右曲折数と移動距離（客人経路）の関係を示す。この図から移動距離が長いほど曲折数が多くなる事が読み取れる。また図中の補助線から1.5m～3mにつき一回の割合で曲折していることも明らかになった。

次に直線距離との比較を図6に示した。これによりどの程度迂回しているのかが分かる。ここでの直線距離とは亭主は仏間△から、客人は表門▲から各茶室の入口までと定義した。これにより分かったことは、無着軒Ⅲは直線距離と移動距離の比率はほぼ1:1であった。比率が1:2であったのが、半桂Ⅰ・長

生庵Ⅱ・半桂①・無着軒⑤であった。また移動距離が直線距離の3倍以上であったのは袴着②・長生庵③・無着軒④であった。長生庵③・無着軒④については亭主が客人に内・外露地を見せるために比率が直線距離の三倍以上になったものと考えられる。

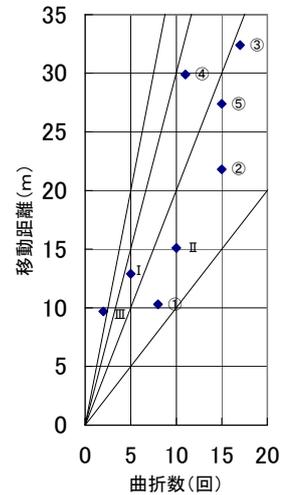


図5 移動距離と曲折数

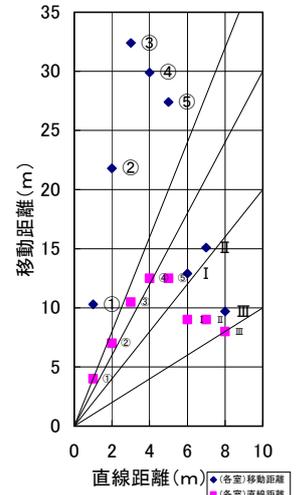


図6 移動距離と直接距離

7. まとめ

今回、堀内家長生庵（茶室及び露地空間）の歩行の際の方向転換（曲折）や移動距離などで示した動線経路樹の作成をしたことで動線を視覚化した。これにより、限られた空間の中でさまざまな演出を行うために迂回させる事が明らかになった。数々のシーンの展開は迂回により創られておりこれは、亭主の客人に対するおもてなしの心である。簡素で美しい露地の準備は重要なものであり、亭主は精魂込めて念入りに整える。打水にしても夏は多め、冬は控えめに撒くのが心得の一つでもある。客人は手入れの行き届いた木々、ほど良く打水された飛石など、亭主の心遣いをゆっくり鑑賞するための工夫であった。

一期一会を大切にす茶道の心は、この露地空間で人生の縮図を表現しているのかもしれない。

【参考文献】

- 1) 堀内家長生庵配布資料
- 2) 宮元健次『日本建築のみかた』学芸出版社